ほない歴史通信
第２９号
2003.12.1

そこに吹く風

「風が吹けば桶屋が儲かる」という諺を聞き、そこにどんな因果関係があるのかが解らずに悩んだのは、たぶん小学校の低学年のころであったと思う。現在、その悩みは解決している。学術的に言えば大気の振動を風と言う。しかし私たちは、吹く風によって生じる様々な現象を見て、風が吹いてることを察することが出来ても、風それ自体を見ることは出来ない。

そこには、春風・秋風、大風、涼風、松風、東風・西風などと言うように、その時々の私たちの感性によって表現される風がありこれらは熟語の下に付く。

また一方、風光、風雲、風雪、風雨、風水、風霜など自然現象の風によって形作られた景観を風景と呼んでいるが、これらは熟語の上に付く。そのどちらも風神の為せる業であろうか、人間の介入する余地はない。

その反面、風俗、風習、風格、風采、風流、風紀、風情などの表現はこの熟語の前後に適切な言葉を添えれば、まことに人為的な表現をもった風である。

そしてそこには、眼に見えない風が作り出す自然と、人間の吹かす風の両者が融合して、その一定の範囲内で独特の雰囲気を持った生活環境の領域が形成される。その土地柄を私たちは風土と言う。まさに人の生活する土地と、風の創り出す空間の表現としては最も適切ではないだろうか。

今現在、私たちが住んでいる場所も生活している環境も、かつては保内郷と称されたワク内であり、今の大子町の領域内である。

ここは歴史上では特異な土地柄で、古代・中世史のうえでは陸奥国に属し白河結城氏の支配を受けながら産金のため同国岩城氏、下野国の那須氏、そして常陸国の佐竹氏等の争奪支配が繰り返され、一国の一地域として落ち着くのは文禄年間の太閤検地によって常陸国に編入され佐竹氏の領地になってからである。

それも束の間、佐竹氏の国替えにより一時は幕府領になり、その後武田信吉が支配、続いて徳川頼宣に替わり、そしてようやく慶長十四年、徳川頼房が水戸藩主となってからである。その後も一時期、光圀公の弟に分地されたこともあるが、これ以降は明治維新までズーと続いた。

この間、支配者・為政者が誰に替わろうと、どんな政治行政が行なわれようとも、そこに生きる人たちがいて、親から子へ、子から孫へと連綿として日々の暮らしを営んで来たはずである。言い換えれば、善くも悪しくも私たちは、先人が吹かせた風によって形作られた、現在の大子町という風土のなかで生まれ育まれて成長し、そして生活している。

このような風土のなかで、これからの大子町、未来の大子町の予想図を描いたとき、今現在に私たちが吹かせている風が、知らず知らずのうちに、大子町の将来にとっては、私たちが想像する以上に大きな影響力をもって現れるかもしれない。

（吉成）

金比羅参詣旅日記

江戸時代の旅は殆どが徒歩である。何百里あろうと「百里の道も一歩から」のたとえの通りだ。もちろん駕籠も馬もあったから、足の弱い者や老人でも旅はできたが、追いはぎやごまの蝿などのおそれもあり、今の乗り物を利用する旅とはまさに雲泥の差であった。「通行手形」を持っていないと、関所を通れないという不便さもあった。通行手形は身分の証明になるものである上に、万一旅の途中で病気や事故で死亡した場合の処置をその土地の役人に依頼するという事なども書かれている。それでも旅をする者はかなり多かった。街道や宿場の整備、農村の経済の発展などが背景にある。

享保三（一七一八）年の十二月七日から翌年の二月二十五日まで七十七日間、大子から四国の金比羅宮まで総勢二十三名で旅をした人々がいる。その中のひとり、左貫の藤田善右衛門が書き残した日記がある。詳細に書かれていて面白い

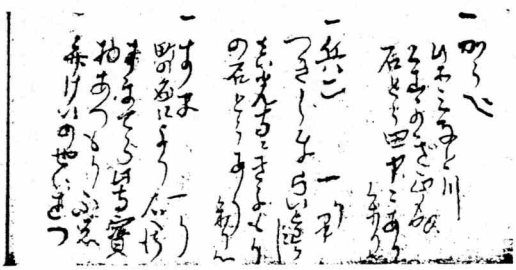
主な旅程は、大子から大洗、鹿島、成田を経て江戸に入り江戸見物。ここまでおよそ五十八里、七日であった。江戸からは東海道を西へ、途中久能山、秋葉山、鳳来寺、豊川稲荷などを参詣して、十七日目に熱田神宮に参詣している。江戸から名古屋までゆっくりした旅でも十二、三日であるが、寄り道をしているために十七日もかかっている。

名古屋からは伊勢神宮へ、さらに熊野灘沿いの街道を通り、那智山、熊野山に参詣、山あいの険路を通って、和歌山側に下り、紀三井寺、粉川寺、高野山に参詣、堺から大阪に到着。

このように多くの神社仏閣に参詣している事がわかる。

大阪からは奈良、京都を見物して、明石、姫路、岡山を経て、瀬戸の海を渡り四国の丸亀へ着く。ここで金比羅宮に参詣し、これからは帰り道となる。福知山から日本海側の宮津に行き、天橋立を眺め、琵琶湖を横断し、関ヶ原から中山道を回り、はるばる善光寺に参詣する。小諸、榛名山、伊香保、渋川、足尾から日光を経て、大子に帰っている。日記の記録ではざっと六四〇里ほどになる。

旅の途中の経費についても細かく書かれている。富士川の渡しは船銭二十四文、安倍川の渡しは四十五文、大井川百四十文などと様々である。宿賃については、余り書かれていないが、熊野山の項には「・・一朱にて泊まり申候・・泊まりにては粗末に御座候・・」などと書かれている。神戸の生田社の項には、「ここより高砂までの間所々にて親切に高砂新規のお宿を指図いたし、道案内記なども差し出し、いろいろと勧め候とも、お構いなくお出でなさるべく候」などと、客引きの多い様や、それを見向きもせず先を急ぐ様子も書かれている。



この旅日記を読むと、この時代の旅が気楽にできた様に思われるが、東海道など主な街道は整備されているにしても、地方にはかなりの険難悪路が多く、さらに病気やけが或いは盗難の心配もあり、周到な準備と覚悟が必要だったに違いない。二十三名の多数で旅をしたのも、助け合いを考えてのことだろう。このような旅に挑戦することができるほど、庶民の経済力が付いてきた時代だったと言える。

（資料提供　左貫　藤田庚一氏）　（石井）

中国を旅して

―「生活」を通して見えた中国社会のひと齣―

今年の八月二十二日から十月二十二日にかけて、中国を旅する機会に恵まれた。上海四三日間、北京三日間、太原八日間、大連八日間といった旅程である。とくに上海では、上海師範大学の学術文化交流中心という名のホテルに一ヶ月以上も滞在したので、旅というよりはむしろ「生活」をしたといった方がいい。短期間ではあれ生活すると、いろいろな人との出会いや情景を通して見えてくるものがある。見聞の一端を綴ってみたい。

周知のように、今、中国は高度経済成長の真っ最中。経済成長率は八パーセント台を維持し、日本とは大違いである。しかし、その成長の過程で沿岸部と内陸部、さらに都市と農村との経済格差が著しくなっていることもよく指摘される。まず実感したのは、様々な形をとって現われるこの「格差」であった。

ひとつは賃金格差。上海での実例を紹介すると、今年六月に大学を卒業し翌七月から国営企業に就職した二二歳の青年は、現在一年間の試用期間中で月収一五〇〇元（日本円で二万二五〇〇円、一元約一五円として換算、以下同じ）。中学卒で、化学調味料を作る会社に勤める二四歳の陳さんは月収七〇〇元（一万五〇〇円）。ある日系企業で部品の組み立てに従事する女性労働者の初任給は六〇〇元（九〇〇〇円）。やはり日系企業、大学卒でコンピュータソフトの開発に従事するシステムエンジニアの初任給は四〇〇〇元、といった具合だ。学歴によって、出身地によって（上海は周辺農村からの出稼ぎ者が多い）、また職種によって賃金の水準は大きく異なっている。

二つ目は食事の格差。中国四大料理のひとつ、上海料理の本場だから金に糸目をつけなければ高級料理はいくらでもある。それを食べさせるレストランも多い。半面、できるだけ安く済まそうと思えばそれも可能だ。宿泊したホテルのそばに学生食堂があった。そこは、好みの食べ物をお盆にのせ、レジで精算するカフェテリア方式の食堂で、学生はもちろん多くの市民も利用している。私もよく使ったが、例えばお粥、佃煮、目玉焼きの朝食ならわずか一・七元（二六円）だし、御飯、スープ、そして小皿に盛られた副食三品の昼食でも五～六元（七五～九〇円）あれば十分。夕食も然りである。この価格帯だから味はさておき、二百円もあれば一日三食べられて満腹になる。先にふれた賃金格差の底辺をなす低賃金は、こうした食料事情によっても支えられているのだろう。

この格差社会にあって、自らをより有利な位置に導き、より有利な位置を確保しようとする強い上昇志向があること、これがもう一つ痛感した点である。例えば、こんな場面を思い出す。上海市内での移動には、料金が安いのでタクシーを活用した。そのタクシー、安全は二の次で、日本では考えられない割り込みと車線変更を頻繁に行い、他の車より少しでも前へ前へと進みたがるのが通例であった。まさに競争である。ある時タクシーに乗って、同乗の中国人女性に「運転手には譲り合う気持ちがないのか」と話したら、彼女曰く、「中国では自分が自分がと前に出ないと駄目、どうぞお先になんて言ったら『アホ』かと思われる」、と。一歩でも前に出ようと、皆考えている。現に彼女自身は、仕事が終わった後日本語学校へ通う毎日である。

若い層にとくに強いこの上昇志向が、そして競争社会を生き抜こうとする行動力が、今の中国の大きなエネルギーになっているように思えてならない。日本はどうか…と、ついつい日本と比較してしまう上海での日々であった。

（斎藤）

第7回大子一高同窓会東京支部総会に参加して

平成十五年十一月二十一日に東京千代田区の法曹会館で開催された支部総会に参加しました。私は，大子一高の現状と，「大子清流高校はどんな学校ですか。」についてお話しました。「これからの学校づくりに，皆様方のお知恵をいただきたい。」と呼びかけました。会に参加された方々のお言葉を紹介します。

仲野さん「昭和十五年卒業。祖父に珠玉のように大切に育てられ，感謝している。学校で林業を学び，現在も，かながわ森林インストラクター会長・かながわ森林づくり友の会長・いせはら森の会長として，森づくりにかかわっている。」

茂木さん「昭和二十三年卒業。母の実家が大子町池田だったので，戦時に疎開をして大子農学校に入学した。三年間の学校生活は忘れることができない。卒業式の前に就職通知があって，そのまま就職したので卒業証書をいただいていない。あの三年間が今の自分を作ってくれた。」

「武田先生に測量を教えていただいた。学生時代に測量士補に合格した。卒業して一年目に測量士の資格を取った。測量関係に進み，日光で測量中にクマに出会ったこともある。大子・大沢間，大子・生瀬間の測量，北茨城市など各地の測量を担当した。今あるのは，すべて学生時代に測量を教えていただいたおかげです。」

藤田さん「昭和二十八年卒業。大子一高教諭であった本田三男さんとは従兄弟。学生時代に，谷田部先生に植物を学び，現在は，森林活動ガイド・自然体験活動リーダーとして森林・植物観察の講師としてお話しています。谷田部先生からいただいた植物図鑑を大切にしています。」

安部さん「昭和三十二年卒業。塙町出身。当時，塙町から越境入学で，大子一高に二名，大子二高に二名合格した。普通科で学んだことを今でも思い出す。」

屋代さん「昭和五十五年卒業。野球部に入部，烏山高校との試合に負けた時，烏山から大子まで，みんなで走って帰ってきた。あの野球部の練習にくらべたら，どんなことにも耐えることができた。静岡・新潟・前橋・南会津，現在は林野庁に勤務している。通常は午後十時退庁，予算の時期は午前二時にもなる。健康のために，朝ウオーキングをしている。」

「生徒を目覚めさせるのは教師の仕事です。」「教師と生徒の人間関係が大切です。」「子どもが伸びるかどうかを，教師がどう考えているかが大事です。」といわれます。卒業生から，武田先生，谷田部先生，菊池信也先生，熊木先生，森先生，仁平先生，仲田先生，桐原先生と様々な先生を話すとき，それぞれの方が学生時代に戻っているようでした。卒業生の母校に対する心をひしひしと感じた会合でした。（野内）

【古文書よりみる古里探訪①　『常陸紀行』】

車場の滝と名馬の馬糞

飯村　尋道

久慈川に架かる下野宮橋を渡り、外大野街道を長崎方面に登り、途中で峠を左折し薄暗い杉林の中を抜け上り切ると、狭い道をはさんで数戸の集落があります。大子町下野宮の塩ノ平部落です。塩ノ平は、海抜凡そ二百米、山の上に耕地が豊かに開け、眼下には久慈川、遠く雲海に浮かぶ奥久慈の山並みが一望できる正に仙境です。

この塩ノ平に「すごくいい滝がある」というので、地元の益子啓介さんに案内していただきました。滝の名は車場（くるまば）の滝、又は地名をとって毛内（もおじ）の滝と云われ、凡そ人を寄せつけない深い谷底にありました。毛内から注ぐ野内ヶ沢と高久から来る沢の合流点にあって、高さ約二十米、神秘的で幽玄な雰囲気の滝です。

ここには安政の頃より、水を堰き止めオドシを通して大八を回しアラコや米をついたという水車があったが、大正九年の大洪水で流されてしまい、沢底の岩盤に残る栗の岩杭をぶった丸い穴だけが当時の面影を残しています。滝の上には水神様を祀る大石があり、旧の九月七日にはオッカシをふかしオヘソクをあげると云う。右手天井を見上げると屏風のような崖が直に聳えています。

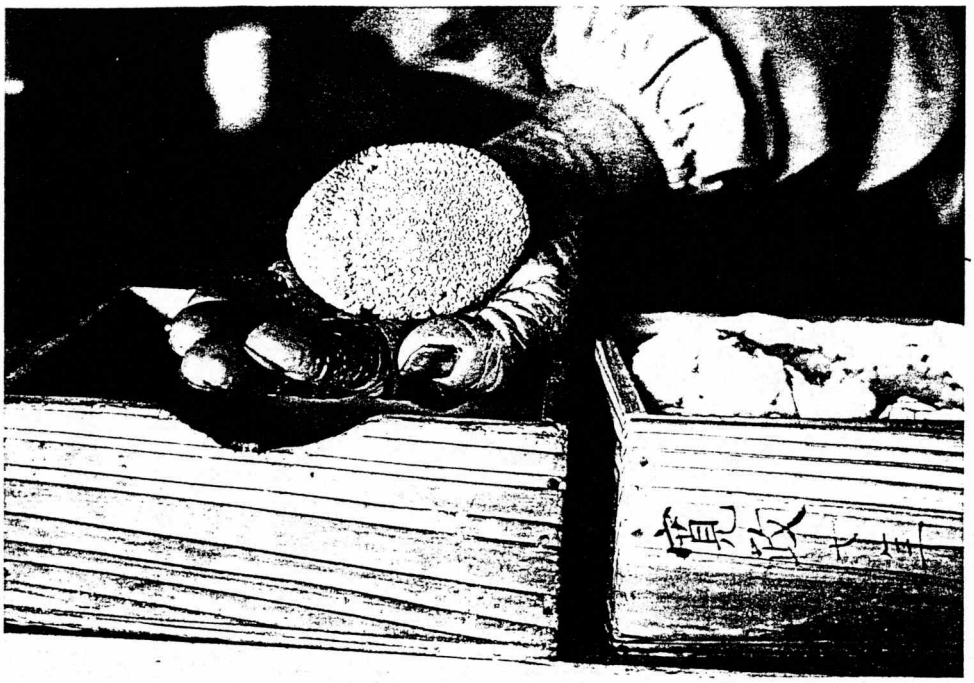
益子さんの話によると、「春になるとあの崖にできた長いサガンボのガラガラと崩れ落ちる音が塩ノ平まで聞こえた。『彼岸メエにみんな落ちればその年は豊作だ。』と親から聞かされた。もよおすっときなどは、滝にウナギがメメズメのようにびっちりついていて、イワナやササガニもなんぼいたかわからない。よっぱらおせえだ。昔は水が豊富で、深い滝壺には水が青々と溜っていて、子供の時、『カメノコにひっこまれっから滝に行くな。』と親に云われた。」そうです。

さらに益子さんの話によれば、「昔、この青々とした滝壺に名馬の駒が棲んでいて、春先にこの駒がいなくと、毛内を通る馬が産気づいたんだと、云われていた。」そうです。

益子さん宅には、先祖が「滝壺からヒラッテきた。」もので、「そいつの糞だっぺ。」と伝えられてる馬の糞があるというので、見せていただきました。この馬の糞については年寄りから話は聞かされていたが、なかなか見せてもらえず、「先祖代々伝わるものだから粗末にするな。」と云って、蔵の中の長持ちにしまってあったのを、初めて見せてもらったのは中学生の頃だったそうです。

馬の糞は、鶏卵大で黄土色、杉板の木箱の中に大切に入っていました。木箱の裏には、『寛政七乙卯五月廿日、□□村中、水戸下野宮益子鴨ェ門』と書かれてあります。鴨ェ門は益子さんの六代前で、寛政七年は一七九五年のことです。この糞については、「糞ではなく馬糞ウニとか馬糞石だ。」と言う人もいるそうです。

車場の滝の探訪と、益子さん秘蔵の馬の糞を拝見した数日後、たまたま文政九年（一八二六）春に久慈郡大子村の人、黒崎貞孝（洗心）の著した『常陸紀行』を読んでいたら、偶



馬糞石（下野宮塩ノ平　益子啓介氏　所蔵）

然にも以下のような文章がありました。

『往年久慈郡下野宮といふ村の一農家、あるとき廏（むまや）を掃除せり。一小石あり。其名黄にして粱（あわ）の如く粟粒せり。馬糞に接りて出ると云。世に往々ありつる馬糞石と云ものなるべし』と。

馬糞石については、『広辞苑』によると『馬の胃中に形成され糞とともに出る結石。うまのたま』とあります。

さて、益子さん宅の馬の糞ですが、『往年久慈郡下野宮といふ村の一農家』ということは、『常陸紀行』を著した「文政九年（一八二六）よりずっと前に下野宮村で」ということになり、馬糞の入っている木箱の『寛政七乙卯』（一七九五）の墨書からも、おそらくはこの馬の糞が『常陸紀行』にある「馬糞石」かと思います。発見場所が『廏』（むまや・馬小屋）ではなく「滝壺からヒラッテきた」とはいえ、疑う余地はないものと思います。

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（県立大子清流高校）
石井喜志夫（元教員）
小澤圀彦（元教員）
吉成英文（大子町社会教育課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田一六六九番地
〒三一九-三五二一　☎〇二九五七-二-二六-七